2009年9月27日　主日礼拝メッセージ

聖書箇所：ローマ人への手紙4章14～25節

説教題：望みえないときに望む

1　すばらしい信仰者アブラハム？

続けてローマ人への手紙を見てまいります。パウロは、旧約聖書の中でもひときわ有名であるアブラハムという信仰者を例に挙げて、信仰とは何かということについて説明しております。

ここを読みますと、パウロがアブラハムの信仰を非常に高く評価していることにすぐに気がつきます。19節「その信仰は弱りませんでした。」20節。「彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰しました。」「堅く信じました。」

このようなみことばを読むと、つくずくアブラハムは偉大な信仰者であって、私たちは彼の足もとにも及ばない。あるいは、彼の信仰のすばらしさが強調されればされるほど、逆に自分の信仰が何かみすぼらしく感じてきて、がっかりしてしまう。最後には、どうせ自分はアブラハムとは違う。神からの恵みもアブラハムの何十分の一しかいただけない者なんだと、自己憐憫に陥ってしまうかもしれません。

でもよく考えていただきたい。アブラハムは最初からすばらしい信仰者だったのか。最初から揺るぐことのない堅い信仰に立っていたのでしょうか。

結論から申しますと、決してそうではない。実は、私たちと何も変わらない人なのです。それなのにどうして、パウロはこれほどアブラハムのことを高く評価するのか。その意味は何か。アブラハムが経験していったことをたどりながら考えてまいります。

2　神の約束を笑うアブラハム

前回見ましたが、アブラハムは自分に子供が産まれないということで長年悩んでいました。当時、子供が産まれないということは、極端なことを言えば、一族が生きるか死ぬかというくらいに非常に大切なことに考えられていました。ある晩、アブラハムはそのことを考えて眠られなくなってしまいます。ぐるぐると悲観的なことばかりを考えて落ち込んでいたとき、神はアブラハムを天幕の外に呼び出し、こう言います。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。あなたの子孫はこのようになる。」

彼は天幕の外に出て、改めて空を見上げます。晴れ渡った空を埋め尽くす星々の輝きに目を奪われます。神がこの世界を造られ、空に浮かぶこの星の一つ一つも造られた。そんな広大な宇宙に比べれば自分は何と小さな人間なんだろうか。こんなちっぽけなちりにも等しい者を、何と神は覚えてくださる。そして自分の将来のことについていっしょに心配してくれる。

アブラハムは自分は神にそむく汚れた者であると告白し、同時に神のあわれみも覚えます。そのようにして彼は主のみことばを信じていきます。そのとき神は、アブラハムを義と認められました。別のことばで言えばアブラハムは救われたということです。

パウロはそのときのことを18節でこのように表現しています。「彼は望みえないとき

に望みを抱いて信じました。」彼はこの時、すでに八十歳を過ぎていたと思われます。妻のサラも当然子供を産めるような年齢ではありません。「望みえないときに」というのは、そのことを言っています。自分も妻も子どもを産めるような状態にはないけれど、神がこのように約束してくださるのだから、それを信じていこう。そのように新たな歩みを始めていきます。

さて、問題はここからです。確かにアブラハムは神の約束を信じました。では、彼は順調に何の問題もなく、この約束を信じ続けていったのか。決してそうではない。聖書は誠に正直にアブラハムの弱さをきちんと書いています。やっぱり時間が経つうちに揺らいでいくのです。

神は確かに約束を与えてくださいました。けれども、いつまで待っても子どもは与えられません。とうとうしびれを切らしたアブラハムは女奴隷に子供を産ませる。子どもの名前はイシュマエルと言いました。正妻に子どもが生まれないのなら、側室に生ませましょう。日本でも皇室とか、大昔に将軍家とかでよく聞くようなことがアブラハムの家庭でも起こりました。

アブラハムはイシュマエルが生まれて考えました。自分の妻をとおして子どもは与えられなかったけれど、この子どもが自分の跡継ぎになるのだろう。神の約束はイシュマエルのことだったのだろう。

ところが、アブラハムが九十九歳のとき、神が彼に告げました。「わたしは妻のサラをとおして子どもを与える。」それを聞いたアブラハムは、心の中で笑ってしまいます。当然と言えば当然です。神は冗談でも言っているのだろう。そうとしかとれません。もちろん神が冗談を言ったのではない。実際にその後、サラは子供を産んでいくことになります。

このように見ますと、アブラハムは必ずしも完璧な信仰者ではなかったとわかります彼も、私たちと全く同じように信仰が揺らぐ人であったのです。

3　揺らぐ信仰であっても

それなのに、パウロはアブラハムの信仰を高く評価しています。どいうことでしょう。パウロは都合の悪いことは言わないようにしているのか。そういうことではない。実は、ここに私たちにとって大きな励ましが書かれていると言うことです。

アブラハムは、確かに一旦は神のみことばを信じました。ところがその後、神から何の音沙汰がないのです。いつまで経っても約束が形になってこない。一つも進んでないようにしか思えない。そうしたら誰だって、いろいろなことを考えたくなる。そうか結局、女奴隷のハガルが生んだイシュマエルがあとを継ぐことになるのだろう。それが約束ということなのだろう。彼は、そんなふうに自分なり考えて納得しようとするのです。

私たちだって、あのときは確かに信じたつもりでも、時間が経つうちに、いつの間にかぐらぐらしていいきます。どうせこういうことなんだろう。この程度のことなんだろう。意識しているわけではありませんが、心のどこかで神の約束のことを少しずつあきらめていく。神の約束が、だんだん小さなものにしか思えなくなる。そういう私たちではないですか。アブラハムのことを見ますと、私たちとまったく変わらない。

さて、神はそのようなアブラハムをどのように取り扱ったでしょうか。揺らぐ信仰をご

覧になり、怒ったのでしょうか。そんな信仰ではだめだ。あの約束は無かったことにする。神はそのように言ったでしょうか。いいえ神はそのようなことはなさいませんでした。

むしろ、神はアブラハムの信仰が弱くならないようにを励ましてくださったのではないですか。時には約束を疑ってしまうようなアブラハムでしたが、神はアブラハムを励まし続けます。堅い信仰に立つことができるようにと助けてくださるのです。

4　アブラハムは私たちの父

アブラハムもそうでしたが、私たちは普段どんなに信じているつもりでも、一旦つらいことが起きますと神の約束を思い出すことなどほとんどできなくなります。

健康な人や、あまり自分の弱さや痛みを感じることのない人は、悲しんでいる人を見るとこんなことを言いたくなります。「何をめそめそしているの。元気を出しなさい。聖書にはこう書いてあるでしょ。あなたは救われているのだから、大丈夫ですよ。」

もちろん、悲しんでいる人を励まそうと、親切で言ったつもりなのです。相手を傷つけるつもりはありません。しかし聞いている方はそうは受け取れない。かえって、怒りが湧いてくることさえあります。「私のこの悲しみがあなたにはわかるはずがない。何にもわかっていない。」

人間が経験する悲しみや様々な心の痛みというものは、信仰によって解決できるのではないかとある方は単純に考えます。しかし、現実はそんな単純な話ではありません。信仰を持っていたとしても、やっぱり私たちは悲しみます。これが私たちの逃れられない現実だということです。

アブラハムは自分が徐々に年をとり体の衰えを覚えていくとき、どうしようもない現実にうろたえました。自分や家族の将来のことを考えたとき、ひどい恐れを覚え、悲しみました。

もちろん、アブラハムは神のことを忘れることはなかったでしょう。でも一方では、あの神の約束は本当だったのだろうかの疑う気持ちを抑えることができません。夢かまぼろしに過ぎなかったのかもしれない。信じたときは確かに感じていた神の約束が、徐々に霧のように消えかかっていくように感じていたと思います。

そんなアブラハムであったのに、「私たちすべての者の父である」と言われています。信仰が強かったから、どんなときにもくじけずに神の約束を完全に信じ切っていたから、だから私たちが模範となるべき信仰の父なのだということではありません。

あの神の約束を疑うような、神の約束のことばを聞いたとき、笑ってしまったアブラハムでさえも、神は愛し続けた。神は信仰が弱くなりかけているアブラハムを励まし、苦しみをともにされて、アブラハムに対して、気落ちすることはない。あなたの後に、やがてこれほどの信仰者たちが起こされるのだからと、彼の手を取り背中を優しく押し続け、つまずくようなことがあれば助け起こし、そのようにしてアブラハムの信仰を成長させてくださった。

神はアブラハムにそのようにされました。今、私たちは言われています。「アブラハムは私たちすべての者の父である。」であるならば、神は私たちにどのようなことをしてくださるのでしょうか。アブラハムにしたことと全く同じ事を、私たちにもしてくださると

いうことではないですか。

私たちはしばしば、自分の信仰をふり返って悲しくなるときがあります。ひどいときには、信仰があったのかどうかさえわからなくなるときもあります。こんな自分ではいけないと思うのですが、どうしようもない。まるで砂のように心が渇ききって、聖書を読む気にもなれない。自分はクリスチャン失格だと落ち込んでしまうこともあります。

ところが今朝アブラハムのことから教えられることは、全く別のことです。私たちは自分のことをだめクリスチャンと思うかもしれない。しかし神は全く別の評価をしてくださっている。どんなに私たちが神の約束がわからなくなっても、信仰が揺らいでも、神はそのことを責めたりするお方ではない。私たちがどんな状態にあろうとも、神の約束は全く変わらない。どんなに落ち込んでいる私たちであっても、神は言われる。「あなたの信仰はこれからますます強くなるのですから大丈夫です。わたしがあなたを力づけます。歩けなくなっているのであれば、わたしがあなたの足を強くします。」そのように神はしてくれる。そして言ってくださる。「あなたは神の約束を疑うことはなかった。あなたの信仰は弱らなかった。」

神がこのように言ってくださいます。ですから、私たちは自分の信仰を責める必要がありません。ここに私たちの励ましがあります。

5　空しい約束ではなく

さて、最後にアブラハムがいただいた約束のことに触れておかなければなりません。アブラハムは、あなたの子孫は星の数ほどになると言われました。その約束はどうなったのでしょうか。実を言いますと、彼は生きている間、自分の子どもとしてイサクただ一人しか与えらえられませんでした。星の数ほどになると言われた子孫を見ることはありませんでした。彼は空しい約束を信じた愚か者ということでしょうか。

いや、決して空しい約束を信じていたはずではありません。そうでないとしたら、ではいったいあの約束はどのようにして成就するのでしょう。例え、死んだ後にそうなるということだとしても、何か空しい気がします。

いいえ、神は確実にアブラハムに約束したことを成し遂げられます。私たちは、神のひとり子がイエス・キリストが十字架で私たちのために死なれたことを知っています。そしてまたこの方が、三日目に墓からよみがえってくださったことも知っています。すべての問題の解決はここにあります。

よみがえられた方は、やがて死んだアブラハムをよみがえらせてくださるのです。そして確かにアブラハムは自分の目で、星の数ほどに増えた自分の子孫を見ることになる。

アブラハムだけではありません。私たちもアブラハムと同じようになります。例え、私たちのいのちがわずかであると知らされたとしても、私たちは絶望することはない。なぜなら、私たちはアブラハムに倣って望みえないときに望みを抱くことができると言われているのです。

例え私たちのいのちがごくわずかであったとしても、私たちには望みがあります。神は私たちをもう一度よみがえらせてくださるのだから。神の愛は、どこまでも私たちを捜し続け、私たちを追いかけて恵みを施そうとされます。

神の豊かなあわれみを覚えつつ、この一週間を歩んでまいりましょう。